

宗教曲と楽譜

加藤良一 2022年5月24日

ミサ曲を歌う場合、「楽譜を持って歌わねばならない」という。これには、果たしてどのような意味合い、背景があるのだろうか。宗教には不案内のため、詳細に触れることはできないが、宗教曲と音楽＝楽譜について考えてみた。

※ミサ曲は、カトリック教会のミサ(感謝の祭儀)に伴う声楽曲である。カトリック教会においては、聖体拝領を伴うミサは、教会の典礼儀式の中で最も重要なものとされ、典礼文の歌唱は、古くからの伝統を有している。ミサ典礼文には、固有文と通常文があり、固有文はミサの行われる日によって扱われる文が異なるが、ミサ曲は基本的に通常文をテキストとしているため、作曲された時代背景が異なっても、歌詞そのものは一定である。

元NHKキャスターで大阪芸術大学放送学科教授の平野啓子さんが興味あるレポートを残している。平野さんは、語り部・かたりすとして、文学作品を暗誦するプロで、30年以上舞台、テレビ、ラジオ等で上演をしている。以下に、「『語り』の特質と暗誦のもつ特別な役割について—クラシック音楽の歌曲暗譜の意義と比較して—」という論文を要約引用しながら考えてみたい。

◆クラシック楽曲や歌曲の「暗譜」

暗譜とは、歌詞と楽曲とをすべて記憶し体内に刷り込むということ。詩人や作家の文学作品を、作曲家が楽曲とし、それを第三の演奏家が聴衆の前で表現する。演奏家は原文学も原曲も十分に理解したうえで、それらに対する自らの思いを重ね、自身の芸術表現を試みる。

では、暗譜は音楽家にとって必然のルールなのか。一般に、ピアノ独奏、歌手の独唱、弦楽器の独奏などは暗譜で行われるのがふつうだが、管楽器は独奏であっても譜面を見ることが多い。これらのことを勘案すると、暗譜は必然ではなく、いわば通例なのである。ただし、コンクールや音楽大学等の試験では、暗譜が指定されている例があることからわかるように、状況や背景によっては、暗譜がルール化されているものもある。

聴衆からすると、暗譜演奏することによって、その楽曲が、その歌手の持ち歌のように見える。そんなことも相まってクラシック歌曲の場合は、暗譜で上演されることが当然のようにになっている。

◆ 歌曲の独奏などは暗譜が通例

クラシック音楽は、初期の頃には暗譜せず、楽譜を見て演奏していたと考えられる。バッハは教会用カンタータを200曲ほど作曲しているが、それらは礼拝の言葉に準じた楽曲で、キリスト教の布教や信仰強化のために人々に聴かせることをその目的としていた。一週間に1曲というかなりの頻度で新曲を作っていたことになる。したがって、短期間で本番の日曜を迎えざるをえず、印刷技術のなかった当時は写譜も簡単にできるわけではなく、一つの譜面を3人くらいで見っていたという記録もあるという。そのような状況下では暗譜で演奏に臨むのはほとんど困難で、ふつうは譜面を見ながら歌っていたと考えられる。

◆暗譜により先読みができる

暗譜できちんと歌うということは、演奏者にはすべての楽譜と歌詞が刷り込まれているということである。楽譜を見て歌えば、歌っている箇所の先をあらかじめ確かめることが容易である。歌い手の各々がそれぞれの感性で演奏をしてしまうことがあるが、全員が譜面を見ていれば、各人の感性で演奏してしまう頻度が減り、演奏全体に約束事が徹底できることにつながる。

譜面を歩行の際に用いる「杖」に例えることもある。杖を突いて歩く人は、杖を手にしながらも杖だけに頼っているわけではない。転ばぬ先の杖である。他の演奏家の音符まで記憶の中でたどるより、楽譜を見ながら表現に専念することのほうが重要だという。楽譜を見ることで安心して演奏できればよりよい表現が可能となり、楽譜はまさに杖と同様、心の安定を保つよりどころとして存在することになる。

◆暗譜を推奨しない、あるいは不必要とする立場

以上述べたこととは別の理由で、暗譜を推奨しない立場の見解もある。

ヨハネ受難曲やマタイ受難曲といった宗教曲は、聖書に書かれている言葉や、キリストの言葉が歌詞として用いられていて、その意味や教示をしっかりと伝えることが第一義である。譜面を外したうえで、人間である歌手がイエスキリストになりきり「神なる私はここでこのように教えを伝え歌う」と表現するのではなく、第三者的に歌うということでもない。たとえ暗譜ができたとしても、楽譜を持ち、歌手を媒体として神の言葉を伝えていることを明確にしながら歌うことを多くの指揮者が求め、それが暗黙の型のようなものになっている。

これは、暗譜を否定しているのではなく、一表現形式として楽譜を用いるのがふさわしい曲だからという見解による。

いっぽうで、暗譜自体を不必要とする見解もある。そもそも歌詞の内容に描かれている世界観を既に作曲家が表現しているのだから、歌手がそこへ感情移入などせず譜面通りに歌えばよい、と考える演奏家もいるのである。

歌曲の作曲者は、言葉を音で機械的に固定したり組み合わせたりすること、すなわち単なる辞書変換のように、表音の符列を構成しているのではなく、歌曲が人々の心に深く響きわたるような工夫を凝らしている。名文や名詩が音楽と一体化することにより、それらの意味内容が一層深く伝わるわけだから、それ以上の表現を敢えて歌手がしなくても十分ではないかというわけである。

暗譜を必要としないという人は、楽譜を見ようが見まいが、良い演奏をすればよい、と言う理由による。その一方で、楽譜を見たからといって暗譜と変わらないだろうという人もいる。感情移入そのものの意義を否定する意見も存在する。いわゆる過剰表現や勘違いによる表現を疎んじ避けることがその理由なのだが、これが行き過ぎると、感情移入により豊かな表現を実現することの可能な暗譜そのものの意義をも否定することになりかねない。

以上のことから、ミサ曲を歌う場合は、なぜ「楽譜を持って歌わねばならない」のか、およその見当はついた。不十分ではあるが、このあたりでこの問題の考察を終える。

ついでに、平野さんの暗譜のメリットに関する考察を参考までに以下に紹介する。

◆歌曲を暗譜するメリット

暗譜の意義についての相反する様々な見解や、暗譜の実践そのものにおける多大な苦労がありながらも、暗譜することによって生じる歌手にとってのメリットとは何なのか。

まず、視線、つまり目の働きが違う。暗譜の場合は目が前を向くため、客席との暗黙のコミュニケーションが取れる。そのため楽譜を見ないほうが、客席との一体感が強くなるという利点がある。むしろ楽譜自体は、極めて大切である。楽譜に書かれているからこそ、それをもとにその内容を掘り下げ、言葉と音符との関係、例えば言葉の音節と音符の運びのどちらをも大切にしながら、作曲者の意図を想定し、自分なりに「こうに違いない」と思ったことを的確に表現することができる。

楽譜がもともになることは勿論だが、優れた楽曲が歌詞に描かれた情景や情感を十分表現しているとしても、歌詞の一つひとつが持つ微妙なニュアンスを聴衆に伝える役割を担うのは歌手なのである。詩の「節」(音節)と、音楽の「律」(リズム)とを、身体の中で融合させ聴き手に届けるのはあくまでも歌手である。

音節は、ほとんどが子音+母音で構成されている。歌う場合は、一音節ずつ律を刻みながら流れるように運ぶことになる。話すときと違い、その母音の響きが長くなり、子音が、母音と母音をつなげる役目を果たす。それが、美しいレガートを生む。レガートで音を運ぶ際の微妙な音の移行の仕方、それぞれの音の膨らみや音色の調整は、演奏家各自の演奏に一任される。

実際は、声を出しているときだけが歌曲の表現のすべてではない。伴奏者に向かって合図を送り、歌曲の前奏が始まり、歌手は歌唱の準備を始める。当該歌曲の世界に想いを馳せ、それが呼吸、視線などにはじまる渾身の表現につながる。この「準備」が、実は、歌の第一声や、その歌曲全体の表現に重要な役割を果たす。「準備」の良し悪しが、演奏の出来栄に影響を与えるのである。

また歌い終わった瞬間から会場にこだまする最後の音が消えるまでの間も歌手の心の中では余韻が漂い響いている。したがってその時間も自らが歌い上げた世界への想いは続いているのであり、「準備」のときと同様に、「フィナーレ」の様態もまた、呼吸、視線など全身のすべての鼓動につながっている。

どのようにプレスして歌い始めるか、初めの息づかいはどうするか、さらに歌い終わったときにどのように振舞うべきなのか。歌手にとって、「準備」から最後の「余韻」までのすべての過程が歌であり、表現なのである。その一連の時間内に楽譜に目をやるということ自体、全身から発する表現に少なからず影響を及ぼしていることになる。その結果として、歌手本人が意図していないにも拘わらず、その声の表現に変化が生じるのは必然のことではないだろうか。

了

Back

「音楽／合唱」TOPへ戻る

Home

「ホームページ」表紙へ戻る